

齋藤幸平 『人新世の「資本論」』まとめ

(齋藤幸平, 2023, 人新世の「資本論」, 株式会社集英社, 東京.)

原稿: <http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/post-capitalism>

はじめに——SDGsは「大衆のアヘン」である！

【大衆のアヘン】

資本主義の辛(つら)い現実が引き起こす苦悩を和らげる「宗教」(マルクス)

【人新世(ひとしんせい)】

人類の経済活動が地球のあり方を根本的に変えてしまうという意味で、地質学の概念を用いて現在は「人新世」に属していると言われる(パウル・クルツツェン)

【資本論】

資本主義を批判的に考察したマルクスの主著

近年明らかになった、エコロジー研究と原古的な共同体研究に基づく

晩年のマルクスの新境地に注目

第1章

気候変動と帝国的生活様式

ノーベル経済学賞の罫

ノードハウスによる気候変動の経済学 (2018年にノーベル経済学賞を受賞)

自然よりも経済成長の側に「バランス」が傾きすぎている二酸化炭素削減率の「最適解」
地球の平均気温は2100年までに**3.5 °C**も上がる(実質的に何も対策をしないに等しい)

パリ協定, SDGsも同じ

ポイント・オブ・ノーリターン

気候危機による不可逆的な破局(ポイント・オブ・ノーリターン)を回避するには、
2030年までに二酸化炭素排出量をほぼ半減させ、2050年までに純排出量をゼロにし、
2100年までの気温上昇を(産業革命以前の気温と比較して)**1.5°C未満**に抑え込む必要がある

日本の被害予測

漁業の被害, 夏の熱波による農作物の被害, 台風の巨大化, 豪雨による被害
気温上昇4°Cでは多くの地域が冠水し, 日本全土の1000万人[現人口の約1割]に影響
[気候危機の被害はコロナ禍の比ではない(第7章)]

大加速時代

データは戦後の「大加速時代」における**経済活動の急成長**に伴って、**環境負荷が飛躍的に増大**していることを強く示唆

グローバル・サウスでの人災／犠牲に基づく帝国的生活様式

先進国における豊かな生活は、「グローバル・サウス」(南半球に限らない)からの労働力と自然資源の収奪の上に成立(=**「帝国的生活様式」**)

「人災」を含め、代償をグローバル・サウスに押し付けることが資本主義の前提・“平常運転”

犠牲を不可視化する外部化社会

先進国は負担をグローバル・サウスに転嫁・**外部化**することで不可視化

労働者も地球環境も搾取の対象／外部化される環境負荷

資本主義は**人間(労働力)**だけでなく**自然(地球環境)**からも掠奪する

そして中核部(先進国)は資源の収奪とそれに伴う環境負荷を周辺部に押し付ける

加害者意識の否認と先延ばしの報い

免罪符的にエコバッグを「買い」、資本が謀るグリーン・ウォッシュに取り込まれる
不公正を直視できない私たちは、それを不可視化する現在の秩序の維持を暗に欲してしまう

「オランダの誤謬」 —— 先進国は地球に優しい？

||

オランダのような先進国での環境改善は、専ら外部化の結果にすぎないにも関わらず、
経済成長と技術開発によって環境問題を解決したと思い込んでしまうこと

外部を使いつくした「人新世」

資本は無限の価値増殖を目指すか、地球は有限である以上、資本主義には限界があり、
外部を使い尽くすと、「人新世」の危機が始まる(先進国でも気候変動が可視化)

冷戦終結以降の時間の無駄遣い

気候変動問題は、それが認識された1988年頃から対策を始めていれば十分解決
可能だったにもかかわらず、冷戦終結後の新自由主義の中で、金儲けが優先され、
気候変動対策の貴重な30年が無駄遣いされた

マルクスによる環境危機の予言

以下ではマルクスを参照しながら、**技術的, 空間的, 時間的**という3種類の**転嫁**について整理

技術的転嫁——生態系の攪乱

(例) 化学肥料の大量生産を可能にした「**ハーバー・ボッシュ法**」は土壤疲弊の問題を、化石燃料を浪費や、化学肥料の使用による生態系の攪乱へと「転嫁」したにすぎない

空間的転嫁——外部化と生態学的帝国主義

(例) 代替肥料となる「**グアノ**」の掠奪は、原住民の暮らしや、生態系に大きな打撃

時間的転嫁——「大洪水よ、我が亡き後に来たれ！」

(例) 気候変動の犠牲を将来世代に転嫁することで、現在の世代は繁栄

周辺部の二重の負担 = 生態学的帝国主義の掠奪と、転嫁がもたらす破壊的作用

中核が勝ち続けるためには、周辺が負け続けなくてはならない

資本主義よりも前に地球がなくなる

↑置き換え可能

石油がなくなる前に、地球がなくなってしまう」(ビル・マッキベン)

可視化される危機

外部がなくなり、先進国でも労働条件の悪化、気候危機、環境難民など、
帝國的な生活様式の矛盾が可視化

大分岐の時代

排外主義運動、民主主義の危機、「気候ファシズム」(第3章)など

「社会主義か、野蛮か」(ローザ・ルクセンブルク)

“happy end”にせよ“bad end”にせよ、資本主義は終わる

第2章

気候ケインズ主義の限界

グリーン・ニューディールという希望？

||

再生可能エネルギーや電気自動車への大型財政出動や公共投資(「**気候ケインズ主義**」)

「緑の経済成長」というビジネスチャンス

気候ケインズ主義は資本主義が経済成長を続けるための「最後の砦」

旗印



SDGs——無限の成長は可能なのか？

しかし、「緑の経済成長」も地球の限界を超えてしまうのではないか

↓

プラネタリー・バウンダリー の画定

||

ロックストロームが提唱した「**人類の安全な活動範囲**」の閾値

成長しながら二酸化炭素排出量を削減できるのか／デカップリングとはなにか

ロックストローム『緑の経済成長という現実逃避』(2019)

経済成長を環境負荷と切り離し(=デカップリング), 二酸化炭素削減と両立させることは不可能

絶対量で二酸化炭素を減らす必要性／経済成長の罠

「相対的デカップリング」だけでなく「絶対的デカップリング」でさえ, 気候危機を解決できない
緑の経済成長がうまくいく分だけ二酸化炭素排出量も増える「経済成長の罠」があるからだ

生産性の罠 = 資本主義では生産性上昇から雇用を守るため, 経済規模を拡大せざるを得ない
→ 気候変動対策も「経済成長の罠」を回避できない

デカップリングは幻想

『成長なき繁栄』(ティム・ジャクソン)

世界全体で見れば「相対的デカップリング」でさえ, 近年はほとんど生じていない
2050年排出ゼロに向けた「絶対的デカップリング」など夢のまた夢

起きているのはリカップリング [=再結合(p.87)]

先進国での「見かけ上の」デカップリングは、二酸化炭素排出の外部への転嫁に負っている

ジェヴォンズのパラドックス——効率化が環境負荷を増やす

効率性が上昇すると、「相対的デカップリング」よりも、
廉価になった商品の消費量増加の効果が上回ってしまう
[結果は「経済成長の罠」と似ているものの、その機構は異なり得る]

市場の力では気候変動は止められない

原油価格が高騰しても、石油は再生可能エネルギーに置き換えられず、
資本主義はオイルサンドやオイルシェールからの改質原油に利潤獲得の活路を見出した

富裕層が排出する大量の二酸化炭素

世界の**富裕層トップ10%**が**二酸化炭素の半分**を排出
貧困層ボトム50%は10%しか排出していない

電気自動車の「本当のコスト」

スマホ, PC, 電気自動車のリチウムイオン電池に必要なレアメタルは、環境破壊や奴隷労働・児童労働を伴って途上国から収奪 (周辺部への転嫁)

「人新世」の生態学的帝国主義

先進国の天然資源の消費量(MF)は、輸入を考慮すれば増えており、GDPと「リカップリング(再結合)」している (「資本主義の脱物質化」は嘘)

技術楽観論では解決しない

グリーン技術(電気自動車)も、生産過程で石油燃料を使用し、また多くの資源の浪費を促す

大気中から二酸化炭素を除去する新技術？

国連のIPCCのシナリオにも採用されているその代表例「BECCS」は、マルクスが問題視した「転嫁」を大規模に行うだけの技術

IPCCの「知のお遊び」

経済成長を前提とすれば、IPCCの専門家も非現実的と知りながらBECCSに頼らざるを得ない

「絶滅への道は、善意で敷き詰められている」 [参考:地獄への道は善意で敷き詰められている]

人新世の破局を避けるには、電気自動車の導入や再生可能エネルギーへの転換と同時に、**脱成長型経済に舵を切る**必要がある

└───→ 脱物質化社会という神話

サービス部門への移行, IoT, クラウド化, ICTに依拠した「**認知資本主義**」による

気候変動は止められないのか

気候変動対策を諦め, 気候変動に「適応」することで
経済成長を目指すタイプのグリーン・ニューディール

脱成長という選択肢

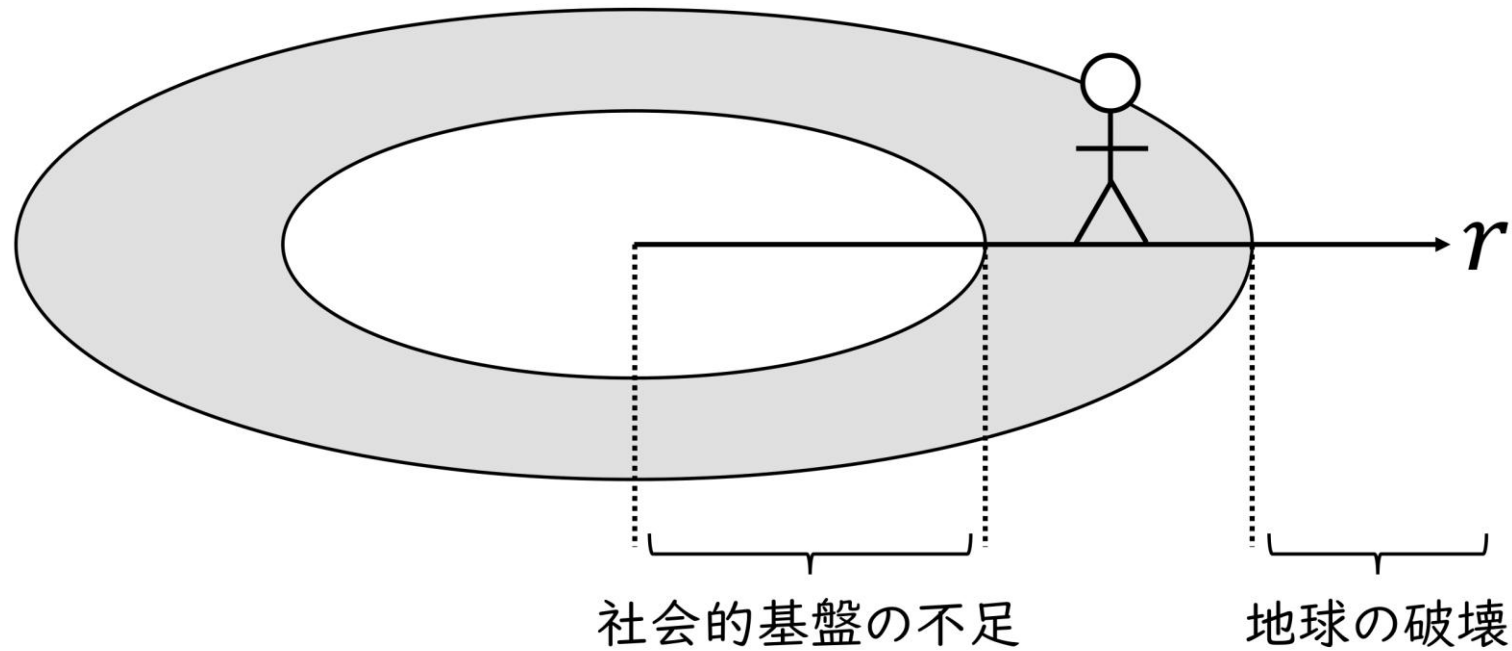
少なくとも, けっして手放してはならない理念
“どのような” 脱成長を目指すべきなのか(次章以降)

第3章

資本主義システムでの脱成長を撃つ

経済成長から**脱成長**へ (∵デカップリングは困難(第2章))

ドーナツ経済——社会的な土台と環境的な上限



ケイト・ラワースの「ドーナツ経済」
(※円周方向の自由度は評価項目に対応)

不公正の是正に必要なもの

これ以上、経済成長・環境破壊をしなくとも、南北格差の不公正はある程度、是正できる

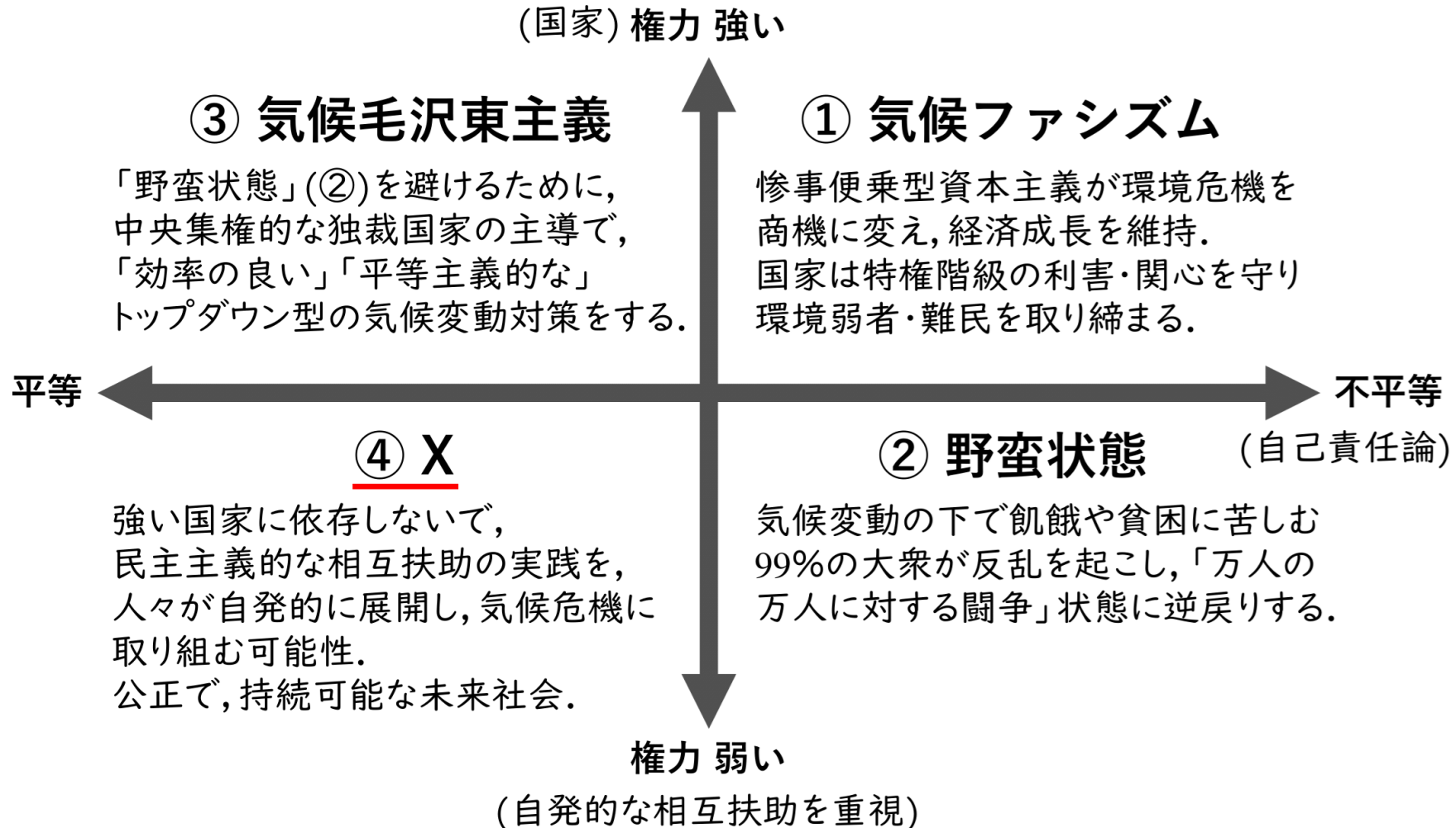
経済成長と幸福度に相関関係は存在するのか

経済成長しなくても、既存のリソースをうまく分配さえできれば、社会は今以上に繁栄しうる

公正な資源配分を 世界全体が「持続可能で公正な社会」へ移行しなければ、先進国の繁栄さえも脅かされる以上、これを偽善的な話として片付けることはできない

グローバルな公正さを実現できない資本主義 (∵外部化と転嫁に依拠(第1,2章))

4つの未来の選択肢



なぜ、資本主義のもとでは脱成長できないのか

環境危機の根本原因は、無限の経済成長を追い求める資本主義システムだから

(資本主義がすでにこれほど発達しているのに) **なぜ貧しさは続くのか**
成長が止まれば悲惨な事態になるのは、そもそも我々が資本主義の中にいるから

日本の特殊事情

日本では「脱成長vs.経済成長」の対立は、気候変動問題の視点が抜け落ちた
「**団塊世代の緊縮論**vs.**就職氷河期世代の反緊縮論**」に矮小化

資本主義を批判するZ世代

新自由主義が格差や環境破壊を深刻化していく様子を体感しながら育った、
Z世代を含む若い世代「**ジェネレーション・レフト**」は、環境意識が高く、資本主義に批判的
欧米では**脱成長**は、環境問題への取り組みを通じて資本主義を乗り越える“**新世代の理論**”

取り残される日本の政治

日本では脱成長など旧世代の理論だという固定観念が定着し、政治的可能性が狭隘化

旧世代の脱成長論の限界

古い脱成長論は資本主義の枠内に留まり, 「停滞」「衰退」といった否定的イメージに呑まれる

日本の楽観的脱成長論

広井良典と佐伯啓思の, 資本主義を維持する旧世代の脱成長論・定常型経済

新しい脱成長論の出発点

確かにソ連は論外だが, やはり資本主義に挑まなくてはならない
法律や政策の変更だけで資本主義を飼い馴らすスティグリッツの「空想主義」(スラヴォイ・ジジエク)

「脱成長資本主義」は存在し得ない (∵形容矛盾)

「失われた30年」は脱成長なのか？

資本主義を維持したままの脱成長とは, 日本の「失われた30年」のような惨状を指す

「脱成長」の意味を問い直す 長期停滞 ≠ 脱成長(平等と持続可能性を目指す)

自由, 平等で公正な脱成長論を！／「人新世」に蘇るマルクス

「コミュニズム」に基づき, 資本主義そのものに挑む“新世代の脱成長論”

第4章

「人新世」のマルクス

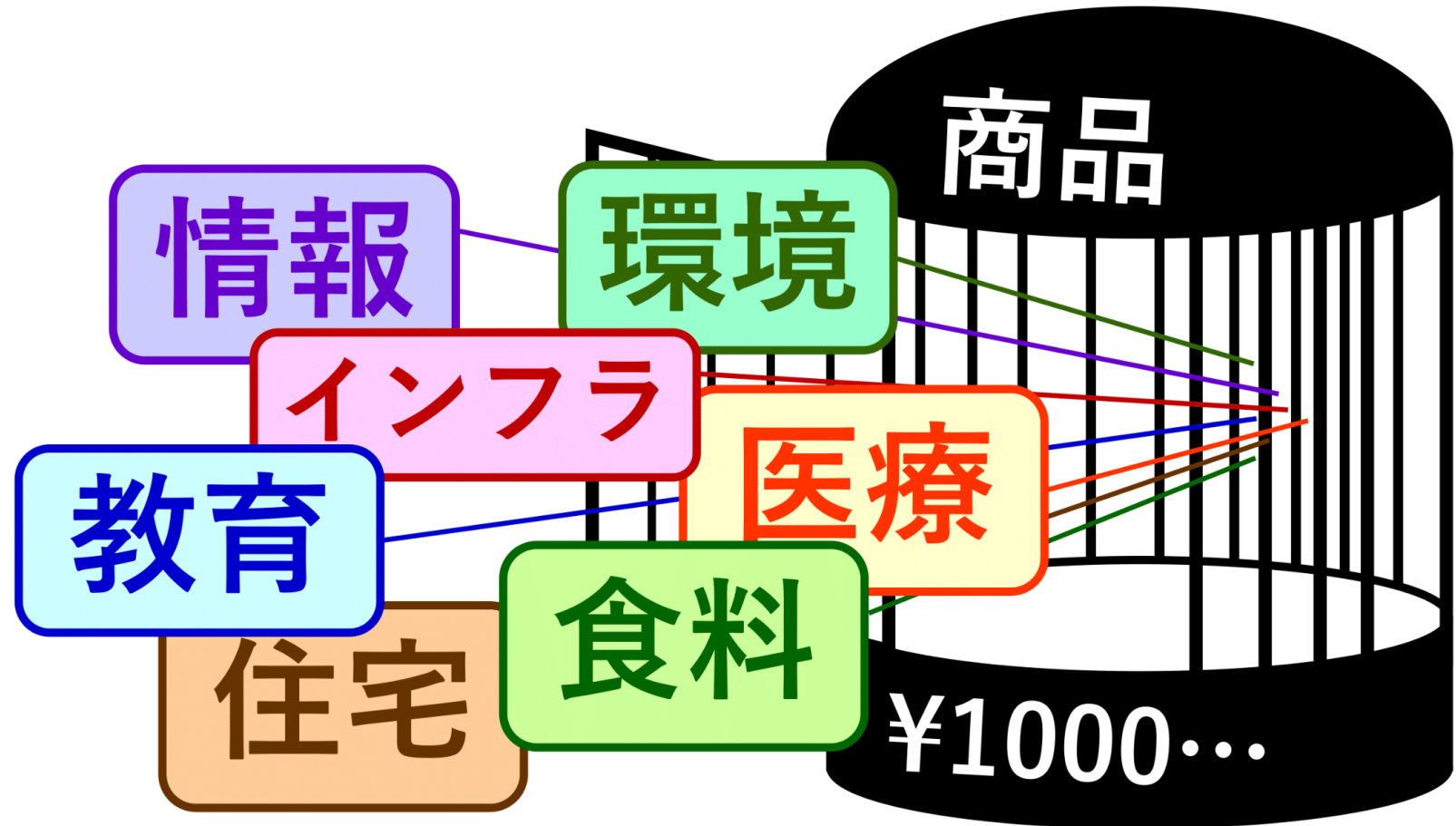
マルクスの復権 新資料も用いることで、「人新世」の新しいマルクス像を提示

(アメリカ型新自由主義とソ連型国有化の両方に対峙する) 〈コモン〉 という第3の道

〈コモン〉 = 社会的に人々に共有され, 管理される富 (cf. 社会的共通資本)

ポスト資本主義 = 脱商品コミュニズム

民主的連帯を通じて
社会の富を脱商品化し
コモンとして自治管理



地球を〈コモン〉として管理する

マルクスは人々が生産手段・地球を〈コモン〉として管理する社会を、**コミュニズム**として構想

コミュニズムは〈コモン〉を再建する

マルクスは〈コモン〉の再生された将来社会を「**アソシエーション**」と呼んだ

社会保障を生み出したアソシエーション

福祉国家はアソシエーションに起源を持つが、「人新世」の危機には有効でない

新たな全集プロジェクトMEGA

『資本論』に取り込まれていない未公開の「研究ノート」も含む

生産力至上主義者としての若きマルクス

生産力を上げる資本主義は革命を招き自滅するという楽観論（『**共産党宣言**』）

未完の『資本論』と晩期マルクスの大転換

エンゲルスが『資本論』の遺稿を体系的に整理する過程で、そこに収まらない**晩期マルクスの理論的転換が削ぎ落された**

進歩史観の特徴——生産力至上主義とヨーロッパ中心主義

「資本主義がもたらす近代化が、最終的には人類の解放をもたらす」「**史的唯物論**」

生産力至上主義の問題点 「エコロジカルな視点の欠如」と批判

物質代謝論の誕生——『資本論』でのエコロジカルな理論的転換

「人間と自然の物質代謝」(人間を含め自然は物質の代謝・循環を営む)

資本主義が引き起こす物質代謝の攪乱 人間の酷使・自然からの収奪

(資本主義は物質代謝に) 修復不可能な亀裂

『資本論』には、近代化による生産力の発展を無批判に称賛するような主張は見当たらない

『資本論』以降のエコロジー研究の深化

リービッチの「掠奪農業」批判を超える、**晩年のマルクスの自然科学研究**

生産力至上主義からの完全な決別

物質代謝の亀裂をさまざまな領域で確かめ、資本主義の本質的な矛盾として議論

持続可能な経済発展を目指す「エコ社会主義」へ

= 資本主義での生産力上昇を追求するのではなく、先に社会主義に移行して、そのもとで持続可能な経済発展を追求 (ただし最晩年のマルクスはこの「エコ社会主義」をも超えていった)

進歩史観の揺らぎ

生産力至上主義からの決別 → ヨーロッパ中心主義も正当性を失う

『資本論』におけるヨーロッパ中心主義

単線的な進歩史観, 植民地主義さえも正当化されかねない

サイドによる批判——若きマルクスのオリエンタリズム

あたかも植民地支配を, 歴史を推し進めるための必要悪として正当化

非西欧・前資本主義社会へのまなざし

自然科学・エコロジー研究と並行して, 非西欧・前資本主義の共同体を研究

「ザスーリチ宛の手紙」——ヨーロッパ中心主義からの決別

ロシアの共同体は資本主義を経ることなしに Kommunismus に移行しうる

『共産党宣言』ロシア語版という証拠

進歩史観に依拠した「革命の単一的なモデル」を拒否

マルクスの Kommunismus が変貌した？

「ヨーロッパ中心主義」からの脱却 + エコロジー研究が促した「生産力至上主義」からの決別
→ **新たなマルクス解釈**

なぜ『資本論』の執筆は遅れたのか

進歩史観に変わるビジョンを打ち立てるための「エコロジー研究」と「共同体研究」

崩壊した文明と生き残った共同体

エコロジカルな視点から、前資本主義社会の共同体が持つ持続可能性へ

共同体のなかの平等主義に出会う

マルク協同体は構成員が使う土地をくじ引きで定期的に入れ替え、富の偏在を防いだ

新しい Kommunismus の基礎——「持続可能性」と「社会的平等」

ゲルマン民族は土地を共有物として扱い、富の独占と同時に土地の濫用を防いだ

「ザスーリチ宛の手紙」再考——エコロジカルな視点で

持続可能で平等な原古共同体は、生産力の発展した西欧より、ある意味、「優れている」

資本主義とエコロジストの論争

「科学と資本主義の闘争」は生産力向上による自然的制約の克服ではなく、エコロジーによる資本主義批判を意味する

「新しい合理性」——大地の持続可能な管理のために

大地=地球を〈コモン〉として“持続可能に管理”

真の理論的大転換——コミュニズムの変化 共同体における循環型の定常型経済

脱成長へ向かうマルクス 定常型経済に依拠した持続可能性と平等

「脱成長コミュニズム」という到達点

マルクスが最晩年に達した「脱成長コミュニズム」は、生産力至上主義的なソ連型社会や、社会主義のもとで経済成長を追求する「エコ社会主義」とも異なる

脱成長 Kommunismus という新たな武器

従来, 相容れないとされてきた マルクス主義 と 脱成長 を結合

『ゴータ綱領批判』

「協同的 (genossenschaftlich) 富」は, 正しくは「協同体的富」(コモン)

マルクスの遺言を引き受ける

未完の『資本論』を「脱成長 Kommunismus」の理論化として引き継ぐ

第5章

加速主義という現実逃避

「人新世」の資本論に向けて
反面教師としての「(左派)加速主義」

||

経済成長を加速させて、持続可能な Kommunismus の実現を目指す

加速主義とはなにか

アーロン・バスターニの「完全にオートメーション化された豪華な Kommunismus」

開き直りのエコ近代主義

「緑の経済成長」と同様の「現実逃避」(第2章)

「素朴政治」なのはどちらだ？

「素朴政治」を批判する加速主義の「選挙主義」「政治主義」も素朴・危険

政治主義の代償——選挙に行けば社会は変わる？ ← No!

政治主義は社会運動・直接民主主義を排除する
資本と癒着した国家によるトップダウンの改革は無効

市民議会による民主主義の刷新

「絶滅への叛逆」と「黄色いベスト運動」の社会運動が求めていた、より民主的な政治への市民参加は、市民議会という形で実現され、ラディカルな提案を生み出した

資本の「包摂」によって無力になる私たち

商品の力を媒介せずには生きられない私たちは、
資本の論理に「包摂」され、資本主義以外の社会を想像する能力を失っていく

資本による包摂から専制へ 「構想」と「実行」の分離

労働者は細切れの単純作業の「実行」だけを担うようになり、自ら「構想」する力を奪われる

技術と権力

一部の人間が、一部の人間の有利になる新技術の運用を「構想」

アンドレ・ゴルツの技術論

ゴルツのいう「閉鎖的技術」はその性質からして、
民主主義的な管理には馴染まず、中央集権的なトップダウン型の政治を要請する

グローバルな危機に「閉鎖的技術」は不適切

ジオエンジニアリングは不可逆で、大規模な変化を地球全体にもたらす。だから、経済成長だけを目指して、最終的にジオエンジニアリングに頼らざるを得なくなる前に、本当にそれでいいのか、もっと民主的な解決策はないのか、一度立ち止まって考えるべきである。

技術が奪う想像力

技術というイデオロギーこそが、現代社会に蔓延する想像力の貧困の一因

別の潤沢さを考える

資本主義は**希少性**を生み出すことで成立
(ある種の)「**潤沢さ**」で資本主義を倒せる

第6章

欠乏の資本主義，
潤沢なコミュニズム

欠乏を生んでいるのは資本主義

投機目的の誰も住んでいない多数の部屋と、大勢のホームレス
投資目的の土地売買が禁止になり、土地の価格が1/3になれば、
その分だけ「潤沢さ」が回復する(土地の「使用価値」は変わらない)

「本源的蓄積」が人工的希少性を増大させる

本源的蓄積 = 資本が〈コモン〉の潤沢さを解体し、人工的希少性を増大
※「囲い込み」は資本主義のなかで繰り返されてきた

コモنزの解体が資本主義を離陸させた

共有地(コモنز)の囲い込みによって生活手段を奪われた人々は賃労働者・商品の買手に

水力という〈コモン〉から独占的な化石資本へ

持続可能で無償で潤沢な水力から、有償で希少だが独占可能な石炭へ

コモنزは潤沢であった

note: 共有財産であるからこそ、人々はコモنزを大切に扱った

私財が公富を減らしていく (ローダデールのパラドックス)

「公富」=コモンズを解体し,意図的に希少にすることで,「私財」は増えていく

「価値」と「使用価値」の対立

資本主義: 富 → 商品

必要な物より「売れそう」なもの
使用価値 (交換)価値

資本 = 価値の自己増殖の“運動”

||
G-W-G' (お金が目的)

※G:貨幣(Geld), W:物(Ware)

資本主義以前 W-G-W' (お金は手段)

「 commons の悲劇 」 ではなく 「 商品の悲劇 」

.||

無料の資源は無駄遣い

↓
水(道)の**商品化・民営化**

↓
水は希少になり「使用価値」も毀損

新自由主義だけの問題ではない

新自由主義が終わっても、資本主義が続く限り、「本源的蓄積」は継続

希少性と惨事便乗型資本主義

↓
(例)「気候変動ショック・ドクトリン」「コロナショック・ドクトリン」

現代の労働者は奴隷と同じ

- 希少な貨幣を手に入れるために、長時間労働を強いられる
- 代わりがおらず大事にされた古代の奴隷より酷い

負債という権力

住宅ローンなどの負債が労働者を勤勉な賃金奴隷にする

ブランド化と広告が生む相対的希少性

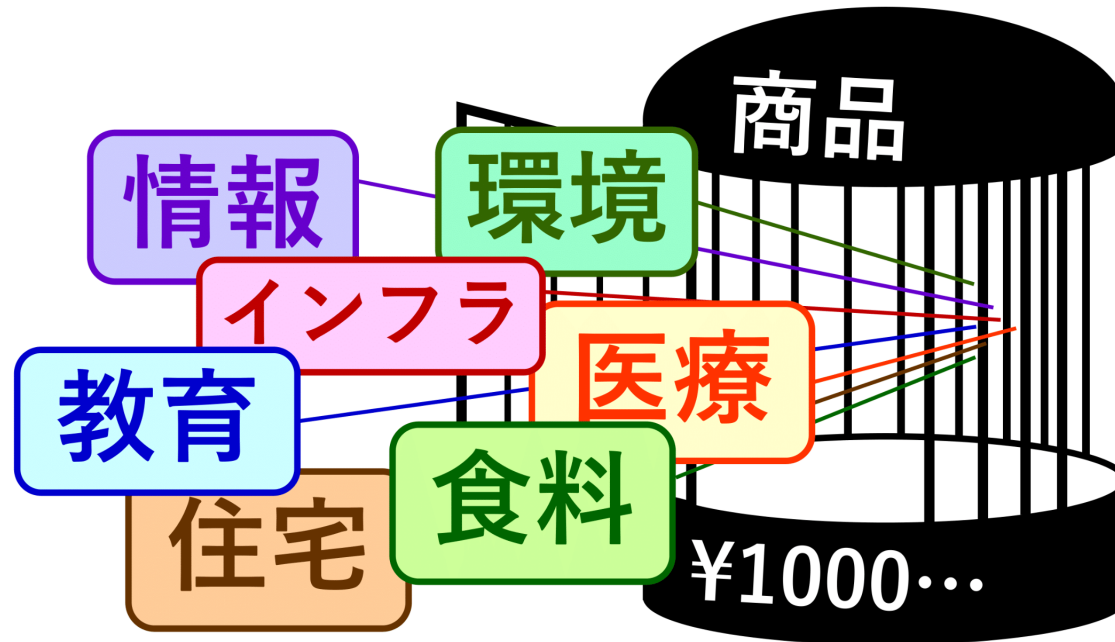
- ブランド化で「使用価値」は変わらない
- 決して満たされることのない消費活動に、際限なく駆り立てられる

備考: 観念や意味の「消費」vs 物そのものを受け取る「浪費」(國分功一郎『暇と退屈の倫理学』第4章)

〈コモン〉を取り戻すのがコミュニズム

ポスト資本主義 = 脱商品コミュニズム

民主的連帯を通じて
社会の富を脱商品化し
コモンとして自治管理



〈コモン〉の「〈市民〉 営化」

ラディカルな潤沢さを持つ再生可能エネルギーは、資本による排他的独占よりも、非営利の小規模の民主的な管理に適している。 ※市民電力の取り組み

ワーカーズ・コープ——生産手段を〈コモン〉に

協同組合は、労働者たちが連帯することで、生産手段を自分たちの手に取り戻し、「ラディカルな潤沢さ」を再構築する

ワーカーズ・コープによる経済の民主化

日本でも、介護、保育、林業、農業、清掃などの分野で、ワーカーズ・コープは1万5千人以上

GDPとは異なる「ラディカルな潤沢さ」

- ウーバーを公有化して、プラットフォームを〈コモン〉に
- 国家がなくとも、水は地方自治体が、電力や農地は市民が、シェアリング・エコノミーはアプリの利用者たちが管理できる

貨幣がないとアクセスできない商品が〈コモン〉になれば、GDPは減少するが(脱成長), 「ラディカルな潤沢さ」が回復し、人々は自由時間を人間的な生活に充てることができる

脱成長 Kommunismusが作る豊潤な経済

脱成長 Kommunismusは新自由主義だけでなく、
人工的希少性に依拠した資本主義をも終わらせる「反緊縮」

良い自由と悪い自由

即物的・個人主義的な消費主義ではない、

集团的・文化的な「自由の国」のための“自発的”な「自己抑制」

備考: Kommunismusは個人の能力を否定し、画一的な平等をもたらすのではない。

むしろ各人の自由な発展が、経済格差や分断ではなく、万人の自由な発展ともなる社会を目指す。

自然科学が教えてくれないこと

「何°Cの世界にしたいか」という限界設定は、
経済的・社会的・倫理的な決断を伴う民主主義の問題

未来のための自己抑制

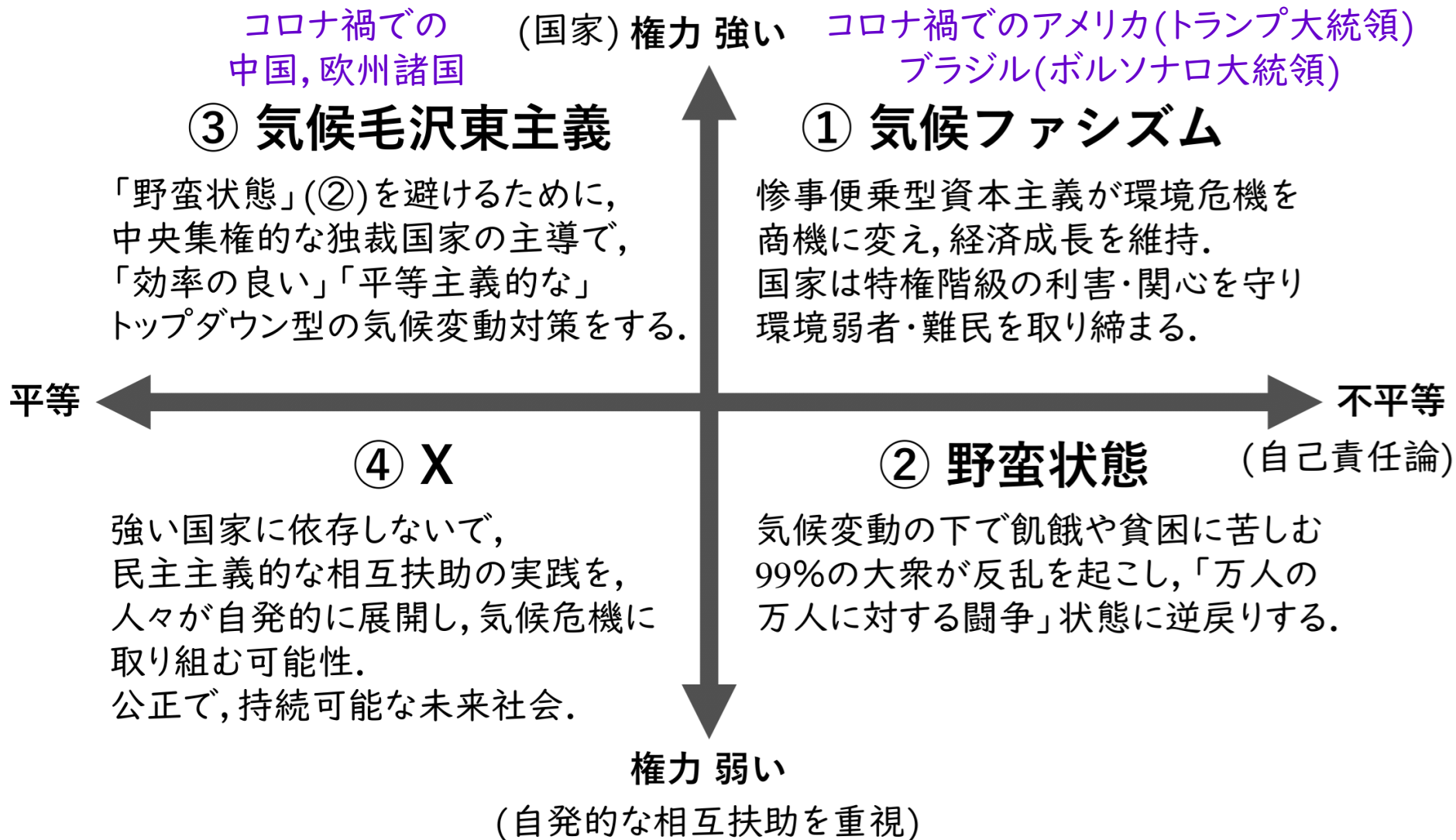
自己抑制としての自由が、資本主義を打ち破る

第7章

脱成長コミュニズムが世界を救う

コロナ禍も「人新世」の産物 気候危機の先行事例としてのコロナ禍

国家が犠牲にする民主主義



- 壁を建設し、環境難民を排除して、ジオエンジニアリングによって、一部の人々だけを守る①「気候ファシズム」
- 国家が企業や個人の二酸化炭素排出量を徹底的に監視し、処罰する③「気候毛沢東主義」

商品化によって進む国家への依存

新自由主義が相互扶助の関係を貨幣・商品関係に置き換えたため、
①「気候ファシズム」、③「気候毛沢東主義」のいずれにせよ、
気候変動に際して、人々は強権的な国家介入を求めてしまう

国家が機能不全に陥るとき

危機の際、強い国家さえ機能しなくなれば、②「野蛮状態」へ

「価値」と「使用価値」の優先順位

- 薬にせよ食料にせよ、資本主義は商品としての「価値」を重視し、「使用価値」(有用性)を蔑ろにする(第6章).
- **④X = 脱成長コミュニズム**

「コミュニズムか、野蛮か」

(第1章末尾(p.56)の「社会主義か、野蛮か」というローザ・ルクセンブルクの警句)

自治管理と相互扶助の道

トマ・ピケティが社会主義に「転向」した

累進性の強い課税を求めるリベラル左派から、「**参加型社会主義**」の要求へ

自治管理・共同管理の重要性

気候危機を前に民主主義を守るためには、単なる再配分にとどまらない、**生産の現場における労働者の自治**が必要(独裁的なソ連型社会主義とは違う)

物質代謝の亀裂を修復するために

必要なのは労働と生産の変革であり、所有や再分配, 価値観の変化は2次的

労働・生産の場から変革は始まる

個人・国政レベルでは気候変動対策へのアクションを起こせなくとも

デトロイトに蒔かれた小さな種

- 廃墟となったデトロイトで、残された住民たちが始めた都市農業により、コミュニティが再生
- コペンハーゲンの、誰もが無料で食べてよい、「公共の果樹」

社会運動による「帝國的“生産”様式」の超克



トップダウン型の「政治主義」ではなく



結果として「帝國的な生活様式」を克服

人新世の「資本論」

晩期マルクスの視点から『資本論』を再読することで“はじめて”，
なぜ脱成長 Kommunismus が「物質代謝の亀裂」を修復できるかを説明できる

脱成長 Kommunismus の柱①——使用価値経済への転換

「使用価値」に重きを置いた経済に転換して、大量生産・大量消費から脱却する

生産の目的を「価値」・GDPの増大から「使用価値」へ(脱成長)
消費主義から脱却し、本当に必要な物を生産するための自己抑制

脱成長 Kommunismus の柱②——労働時間の短縮

労働時間を削減して、生活の質を向上させる

使用価値経済への転換は、意味のない仕事を大幅に減らす

(生産力的には、既に長時間労働は不要)[備考: 広告業, コンサルタント, 金融業などにおけるブルシット・ジョブ]

脱炭素社会に移行するには、生産力の上昇による労働の削減は不可能

AIによるオートメーション化がなくとも
皆が望めば
民主的に**必要労働を再配分し**
ポスト希少性
と**余暇社会**を**既に実現できる**

備考:ただしA.ベナナフによれば技術革新は衰退しており、実際に雇用を破壊しているのはテクノロジーの進歩ではなく経済の長期低迷である。とはいえ、オートメーション化がなくとも社会運動を通じて民主的に必要労働を再配分し、ポスト希少性と自由な余暇社会を実現することは既に可能であるとするベナナフの見解は、斎藤幸平がポスト資本主義として構想する民主的な脱商品コミュニズムと軌を一にする。

(A.ベナナフ『オートメーションと労働の未来』)

脱成長コミュニズムの柱③——**画一的な分業の廃止**

画一的な労働をもたらす分業を廃止して、労働の創造性を回復させる

- 余暇を増やすだけでなく、辛く無意味な労働そのものも魅力的なものに変える
- 画一的な労働の廃止は脱成長にもなる

脱成長コミュニズムの柱④——**生産過程の民主化**

生産のプロセスの民主化を進めて、経済を減速させる

労働者たちが生産手段を〈コモン〉として民主的に管理

- 時間のかかる意見調整 → 脱成長
- 大企業の非民主的な経営や、官僚主導のソ連型の独裁国家とは対照的
- 知的財産権や(GAFAなどによる)プラットフォームの独占を禁止 → 知識を〈コモン〉に
- 市場の競争原理から解放 → かえって各人の能力が発揮

脱成長コミュニズムの柱⑤——エッセンシャル・ワークの重視
使用価値経済に転換し，労働集約型のエッセンシャル・ワークの重視を
ケア労働は生産性の上昇が困難. 労働生産性よりもケアの質が重要.

ブルシット・ジョブ vs. エッセンシャル・ワーク

- **ブルシット・ジョブ(クソどうでもいい仕事) ↔ 高収入**
 - ケインズの予測が当たらなかったのは，
資本主義が大量の無意味な仕事を作り出しているから
 - ◆ 単純に生産力の観点からは，人類はとっくに長時間労働から解放されて
いるはずだが，際限なく価値増殖を求める資本主義がそれを許さない
- **エッセンシャル・ワーカー ↔ 低賃金, 長時間労働**

【ブルシット・ジョブ(BSJ)】

被雇用者本人でさえ，その存在を正当化しがたいほど，完璧に無意味で，不必要で，
有害でさえある有償の雇用の形態である. とはいえ，その雇用条件の一環として，被雇用者は，
そうではないととりつくるわねばならないと感じている. (グレーバー)

BSJの典型例は広告業，行政官，コンサルタント，事務員，会計スタッフ，IT専門家などに多く，
概ね情報関連部門に対応する.

ケア階級の叛逆 (資本主義の論理に対抗)

日本でも、保育士一斉退職、医療現場からの異議申し立て、教員スト、介護ストなど

自治管理の実践

経営会社が2019年に突然、閉園した世田谷区の保育園を、保育士たちが運営会社経営者や、彼に雇われた園長の仕事は「ブルシット・ジョブ」と判明

脱成長コミュニズムが物質代謝の亀裂を修復する



- ①使用価値経済への転換, ②労働時間の短縮, ③画一的な分業の廃止,
- ④生産過程の民主化, ⑤エッセンシャル・ワークの重視

ブエン・ビビール(良く生きる)

気候危機をきっかけとして、ヨーロッパ中心主義を改め、グローバル・サウスから学ぼうとする新しい運動が出てきている

第8章

気候正義という「^て ^こ挺子」

マルクスの「レンズ」で読み解く実践

(他方で理論家は現場の苦しみや抵抗の試みからも学んでいく)

自然回帰ではなく、新しい合理性を

都市という資本が生み出した空間を批判し、新しい都市の合理性を生み出す

恐れ知らずの都市・バルセロナの 気候非常事態宣言

「フィアレス・シティ」

市民の力を結集させて地方自治体で策定された
具体的な気候変動対策(事実上の脱成長宣言)

社会運動が生んだ地域政党

新自由主義的グローバル化の犠牲になった街バルセロナで始まった「**15M運動**」が、
地域政党「バルセロナ・イン・コモン」の誕生につながり、市長に就任したアダ・クラウは
草の根の声を市政に持ち込むシステムを整備した

気候変動対策が生む横の連帯

公営で再生可能エネルギーを地産地消 → 地域コミュニティの活性化・貧困対策
太陽光パネルを設置した公営住宅 → 市民の暮らしの場を確保 など

協同組合による参加型社会

自治体が公共調達が発注先として協同組合を選べば、協同組合の声が市政に届くようになり、**参加型民主主義**が促進される

気候正義にかなう経済モデルへ (気候非常事態宣言)

||

気候変動を引き起こしたのは先進国の富裕層だが、その被害を受けるのは化石燃料をあまり使ってこなかったグローバル・サウスの人々と将来世代である。この不公正を解消し、気候変動を止めるべきだという認識

ミュニシパリズム——国境を超える自治体主義

「フィアレス・シティ」の国際的な連帯(≒ミュニシパリズム)で資本に対抗
例:水道の再公営化・市民営化

グローバル・サウスから学ぶ

グローバル・サウスにおける、新自由主義・グローバル資本主義への先駆的な抵抗運動「サパティスタ」「ヴィア・カンペシーナ」

新しい啓蒙主義の無力さ

抽象的理念を唱えるよりも、現実の「気候正義」と「食料主権」の運動から学ぶことが重要

食料主権を取り戻す

資本主義アグリビジネスに対抗し、草の根の協同組合型農業を促進するためのプラットフォームを作り出した「南アフリカ食料主権運動」

グローバル・サウスから世界へ 食料主権から、より大きな気候変動の問題へ

帝國的生産様式に挑む

石炭から人造石油を精製するサソール社の操業停止を求める南アフリカの環境運動は、奴隷貿易に端を発する**帝国主義と人種差別の問題を気候変動問題につなげ、気候正義の文脈へと拡張**し、国際的な運動との連帯を求める

気候正義という「梃子」

マルクスが非西欧・前資本主義社会から「脱成長」の理念を取り入れたように、**バルセロナはグローバル・サウスから気候正義を取り入れ**、革新的な気候非常事態宣言を生み出した

脱成長を狙うバルセロナ

グローバル・サウスからの呼びかけへの応答は、実質的な「脱成長」経済への転換を迫る

従来の左派の問題点 = 経済を回すだけでは、「人新世」の危機は乗り越えられない

ソ連は「国家資本主義」

「ラディカルな潤沢さ」のために

希少性の真の原因は新自由主義の緊縮政策ではなく資本主義そのもの

→ 反緊縮ではなく脱成長による「ラディカルな潤沢さ」を

時間稼ぎの政治からの決別

トップダウン型の政治主義(グリーン・ニューディール, ジオエンジニアリング, MMTなど)は資本主義という根本原因を必死に維持しようとしており, 時間稼ぎしかできない

経済, 政治, 環境の三位一体の刷新を

市民の意見が国家に反映されるプロセスを制度化し,

「資本主義の超克」, 「民主主義の刷新」, 「社会の脱炭素化」を開始

生産の〈コモン〉化(協同組合, 社会的所有, 「〈市民〉営化」), ミュニシパリズム, 市民議会

持続可能で公正な社会への跳躍

コミュニティや地方自治体, 社会運動から始まる**脱成長コミュニズム**への道

おわりに——歴史を終わらせないために

- **3.5%** [のオーダー]の人々が立ち上がれば, 世界は変わる(エリカ・チェノウェス)
- 「人新世」ではなく, 正確には「**資本新世**」